

群馬詩人クラブ

会報

No.297

編集／群馬詩人クラブ幹事会
代表／磯貝優子
発行／群馬詩人クラブ事務局
〒370-3504
北群馬郡榛東村広馬場1067-2
現代詩資料館「榛名まほろば」内
印刷 三協印刷
振替番号 00160-4-708314 中澤陸士

主な記事

- 詩誌は、いま-⑧『詩的現代』…… 2
●群馬年刊詩集 第39集 配付について… 2
●第53回上毛文学賞作品
「飛べないホタル」石田 洋…… 3
●詩集評…… 4
井上英明『日常から』 志村喜代子
堤 美代『花筐』 浅見恵子
金井裕美子『ふゆのゆうれい』 原田 鰯
●イベント報告…… 6
第15回あすなろ忌／第19回薔薇忌
第44回朔太郎忌／現代詩ゼミ
第30回まほろばポエトリーステージ
●新入会員あいさつ 石田 洋…… 9
●受贈詩誌御礼ほか…… 9
●総会と秋の詩祭開催のお知らせ… 10
●編集後記 …… 10

その後の「裳」

曾根ヨシ

詩人クラブからの執筆依頼の通信には、「女性ばかりの詩誌「裳」に男性が入会した。その後の詩的状况について書いてください。」とあった。驚いた。詩を書く時に男や女を意識し書くはずがないからだ。詩とは人生を辛抱強く生きる、その自分の中から自然に必然的に出てくる言葉なのだから。まずは入会頂いた二人の紹介を簡単にさせて頂く。この度、裳に入会したのは本間修一さんと、石田洋さんである。二人は同年令で本間さんは東京に生まれ小学校から大学までを東京で過ごし卒業後は新聞記者。地元生まれの石田さんは高校の英語教師でした。二人とも詩のグループには入らず一人で書いていたようである。個性豊かな実によく優秀な二人で裳同人は学ぶこと

が多く作品はレベルアップして来たと自負している。二人が入会してくれたのは裳127号からでまだ三号のみの発刊をみたに過ぎない。しかし二人はその前に上毛詩壇に投稿を始め熱心な投稿者となっていく。石田さんに至っては第一作「秋を刈る」で選者の私も舌を巻いた。うれしかった。その熱心さには頭が下がった。「裳は男は入れないのですか」と聞いてきた。いやそんなきまりはありません。「裳」は私の発案ではなかった。崔華国さんが女だけで同人誌をやってみないかと私をたきつけたので面白そうだと思いついたのである。何といってもここ二三年間であこがれの賞を独占してしまった二人である。同人への入会

を打診すると全員大喜びで賛成し元気づいた。二人は「裳」127号から同人となり第一回の合評会では存分に発言してくれた。男性の視点と視野は異なり詩の題材の掴み方が女性よりも広く啓発された。「裳」発行の初期に女ばかりでかたまるのはあやういと意見を呈してくれた詩人の方々も通じる詩の真実をひたすら追求していくのが望ましいのではないか。」お二人も性差を全く意識はしない。共通の基盤の上でお互いが切磋琢磨しお互いの感性を高めていけばそれでよいと考えている。結びとして、男性二人が入会しどのような変化があったのか感想を聞き、記しておいた。一、合評会がにわかに活気を帯びて細部にまで目が届くようになった。二、女性の遠慮がなくなり意見や感想が出せるようになり思いが伝わってくる。三、作詩に関してより一層女性特有のこまやかさとしなやかさが出たように思える。四、何と言ってもよいことは「裳」同人の詩に大きなうねりが出た事である。今後この動きを大切にしていきたい。以上の事は男性陣からの感想の一端ですが、貴重な助言となりました。これからも皆様の変わらぬご指導ご助言をいただければ幸いです。

詩誌は、いま⑧ 季刊『詩的現代』(第二次) について

季刊『詩的現代』(第二次)は、第一次のそれがそうであったように、全国的な組織の会員雑誌である。同人誌でもなければ、群馬の詩誌でもない。できれば、発行所は、第一次のそれがそうであったように、東京かどこかに置きたかったが、呼びかけ人の樋口武二さんも私も、たまたま群馬に住んでいたので仕方がなかった。いや、樋口さんも私も、それぞれに故郷の群馬に対する思いはあるが、それとこれとは別である。もちろん、事情を知らない人が、『詩的現代』を同人誌であり、群馬の詩誌だと思うのは仕方がないし、まあ、どうでもいいことかもしれない。

ただ、『詩的現代』がことさらに「季刊」をうたっていることの意味は重い。なお私たちは、一定のポリシーで、それをきちんと守ってきた。私たちに、ことさらな主張はないが、私たち自身の表現の場を確保するための努力だけはしてきたという自負はある。この「ことさらな主張がない」という言葉を取り上げ、あざけ囃うような文章を書いた方がいたが、この本質が分からない人は、どこの世界にでもいるものだ。(文責・愛敬浩一) 補遺

現在のものは「第二次」であり、復刊は二〇一二年五月である。第一次は一九八〇年の

二月〜一九八七年の五月であった。第二次刊には手間取り、発刊までには一年近い時間が必要だった。「季刊」ということや、「ゆるいネットワーク」、「何ものにも縛られない自由な場(誌面)」などに固執したからでもある。因みに、第一次の創刊時と終刊時の顔ぶれを記しておく。創刊時は「戸谷 尚・永井孝史・倉尾 勉・吉岡良一」の編集委員。発行所は茅ヶ崎の「難波保明」方であり、印刷は世田谷の「七月堂」となっている。終刊時は「鈴木比佐雄・愛敬浩一・佐藤榮市・野村喜和夫」の編集委員、発行所は柏市の「鈴木比佐雄」方印刷は東田印刷である。

現状(第二次)は毎号特集を組み、二百頁を超す体裁で季刊発行をつづけている。まさに、「何ものにも縛られぬ定期的な発表の場」として維持されている。会員は、北海道から九州まで34名、事務局(発行所)は富岡市、編集部は伊勢崎市に置かれている。現在の会員名を記すべくとも思ったが、省略させて頂くことにした。(この項につき文責・樋口)



群馬年刊詩集 第三十九集 配布について

発行は、十一月二十三日です。
年刊詩集にご参加くださいました方には、総会の受付にて配布(二部)いたします。

参加費は左記にお振込みくださいますようお願い申し上げます。

なお、当日欠席で郵送を希望する方は、参加費に送料500円を加算してください。

参加費振込先(郵便振替)

口座番号 0010005655622

口座名義 斉藤 守弘

*振込手数料は自己負担となります。

*年刊詩集分〇〇円・郵送料500円と明記のこと。

問い合わせ先

〒370-3504

北群馬郡榛東村広馬場1067-2

現代詩資料館「榛名まほろば」内

群馬詩人クラブ事務局 富沢 智

FAX 0279-550665

メール harunamahoroba@nifty.com

第51回

上毛文学賞(詩部門)

受賞作

飛べないホタル

石田 洋

闇が深まるのを待ち

「今日はどうだろうか、出ているかな」と

眩きながら坂道を急ぐと

埋れ火のようになかすかな光が見えた

吸い殻の光ではと思ひ踏み消そうとした

「はっ」と

とつさに歩幅を変えた

「ホタルだ!」

踏みつぶすところだった

飛べないホタルが舗装の上にくすぐまり

光を点している

嬉しさと悲しさが入り混ざって

こみ上げてきた

飛ぶこともできずに

苦しんでいる生き物の

見えない表情が

厚い闇をやぶり

訴えてくる

指を差し出しても動こうとせず

生へのこだわりの光を

絞り出している

藪から湧き出る水の音は

ここでは聞こえない

水辺の草むらに移し

小さな光に祈った

田園はしんと静まり

ホタルのともす微弱な光が

全身を駆け巡った

石田 洋 略歴

昭和16年12月前橋に生まれる。

詩誌「夢」同人

前橋市在住

詩集評

井上英明詩集『日常から』

強靱な孤

志村喜代子

詩集『日常から』。五冊目の詩集誕生にしては、簡潔明瞭な題、いや逆に平常心ゆえの居直りの無敵ささえ感じさせる。日常は、日常でしかなく、されど落とし穴の深さをなんとしよう。自己の自己自身への関係の仕方、この鍵のかけ方によって、日常とは鋭角すぎる。井上英明なる日常が立ち上がってくる。詩の行を追ってみる。

虐げている者を蹴散らし この身を開放してくれる王 新しい時代の到来「待降節」許すことと諦めることのとりの違いをしてはいないか「降誕祭」、罪を犯したことの無い右足が痛むのだ「灰の水曜日」。彼が信仰する神への遺恨にちかい愛は、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」で祈りが、同化が、呪文が、気づかなかった私がここに居るに帰着する。「防災センターにて」では、行方不明者の名簿の中に 知り合いがいなかったこととて安堵する。傷みの連鎖は消すに消えない

痕を刻む。些細なことで取り囲んで 自尊心までも剥奪していくやり方「日常から」。作品が糾弾する孤への強靱な視線は、鮮烈である。胎児にとつて 生まれ出るといふ自然

これしかない「ニュースを聞きながら」、でも俺の視界が揺れたことはなかった「デジタルカメラを買いに行く」、今も私を振り分けようとする存在を黙認する隣人に 私は恐怖するのだ「異国にてⅡ」、たった一人の女の夢にさえ答えぬ科学は「美しい言葉Ⅰ」、安らぎは彼女のためにだけ「美しい言葉Ⅲ」は、第一連で、嘆き悲しむ聖母の描かれた小さなカードの裏には 彼女の一生がたった六行で語られていた／洗礼名 インマクラータ／一九二二年誕生／一九二二年受洗／一九四六年来日／一九九七年帰天／享年七四歳／第六連では、穏やかに時代が流れて久しい 石を投げた時代が 今日のための過渡的なものであるというなら 今日の不条理を 彼女のようにならなければならぬ 全身で受け止めて 私は／。

孤が放つ白光を、凝視する強靱な詩群だ。

(註 大字Ⅱ引用部。編集)

堤美代詩集

堤美代『花筐』について

浅見恵子

亡き人たちへの想いを描く作者の詩から感じるのは、彼らへの篤い想いと同時に、今も生き続ける自身へのかなしみである。大切な人を失ってなお、何故生き続けねばならないのかという思いは、同じ経験をした人なら誰しも抱く間いだと思ふ。この「花筐」には、それでも生きるしかない、という決意が感じられ、単に弔う詩集ではないと感じる。

「髪に留めたカチューシャが／真ふたつに割れて落ちた(夕顔)」……そのときから良くないことの始まりを予感させる。続いて、先に逝き、自分まで繋がる道すじを作った祖先たちが夢うつつに現れる。それらは自身の実感というより夢物語のようである。近づいてくる黄泉のにおい。無意識の漠然としたものだった不安が、次第に輪郭を見せ、「死」として姿をあらわし始める。

先の戦争を生き抜いても、歳を重ねれば皆に等しく死がおとずれる。「わたしは 死んでなどいない(離見)」。作者は今も戦っている。死と。しかし作者の身近な所では、次々と戦いの中で倒れている親しい人たちがいる。「想い出すためには どうしても／忘れなければならぬ(道行)」。死者のことを思えば思うほどに、生きる自分が濃くなる。そし

て日常の中で、いつしか死者のことを忘れて
いる自分に気が付く。それは悪い事ではない。
しかしそれに気付くことは苦しいことである。

亡き人の骨をひとかけら欲したが、家族
でないためになくならず、「生きているうちに
／噛み切っておくのだった(骨箱)」とこぼ

す一節にはドキリとするが、共感せずにはい
られない。遠慮なんかしないで、私にも分け
て欲しいと一言言えたらどんなにか楽だろう、
この辛さが救われるだろう。そんなことを
思っては駄目だ、家族が一番辛いのだ、とい
うのが模範解答なのだろうが、それでも、私
もその人を愛していた！ そう自由に言え、
それを許してくれる世界であって欲しいと、
願わずにはいられないのは我が儘だろうか。

紡がれている詩のひとつひとつから、命が
見える。命を持って作者と関わり、一緒に生
きてきた人たちの最期の命の輝きが、この詩
集の輝きを強くしている。それは読者を、時
につらくする。しかし、そのつらさに涙する
と、不思議と慰められた気がする。それは、
このかなしみを知るの自分一人ではないの
だと知るからだ。共感はいである。

大切な人がいなくなったことを、時に忘れ
ながら、それでも生きる作者は、言葉として
彼らを思い出し、再会し、詩として蘇えらせ
ているのだと思う。そこには、かなしみと、
愛よりも熱い想いがある。詩を書かずにはい
れなかつた、書く事で生き続けられた作者の
姿が見える。

金井裕美子詩集

『ふゆのゆうれい』を読みました

原田 鱈

やさしい雨／水になる日に／水のレストラ
ン／ふゆのゆうれい／ゆうれいの夜／浅黄桜
／わかみ雑貨店／おすそ分け／古書現生／ソ
ナチネ／波打ち際／八月、／白いこども／目
覚めたら八月のプールの底にいた／不明／透
きとおるまで／置き場／小石／隙／もう、月
が出ている／末吉／ささやかな旅／二人多い
／さよならだけが／あとがき

なんと、目次のページからタイトルを書き
うつしたらずで「詩」。選ばれた言葉のて
ざわり、花びらのような彩り、生きづくグラ
デーション。組みあわせた文節は、ときにう
ねり、波打ち、一瞬、眩しかった視界を濁ら
せる。カラーージュの宇宙だ。そう、金井裕美
子さんはタイトルの達人でもありました。

前作、「わたがしとけいとう」(この読みずら
さがいい)から十三年を経て、第2詩集「ふ
ゆのゆうれい」が刊行された。あえて詩集と
して一冊にまとめることは、単一の作品では
見えてこないものに、もっと感性全体の世界
として確かな重力を与える。この二冊の間に、
十三年という月日の流れが変貌させたものと、
反対に二冊に通底するもの、それらがはつき
りを見せて来る。ほくのなかで、第一詩集の
世界を代表して感じさせる作品は「コーマ君」
「ヒア・カム・ザ・サン」など。当然、現在と

は、社会情勢、自身の年齢、その他全てが違
う。ときにかつたるい雰囲気のかた隅に美し
い感傷をちらつかせながら、しっかりと風
に向かって前を向いて立っていた。陽はまた昇
る、のだ。表紙も有村真鐵さんの暖かい色調
の優しいイラスト。

ひるがえって、十三年後の第二詩集「ふゆ
のゆうれい」。表紙も内省的な雰囲気なチェ
ンジ。世はまさに、デフレ社会の徒労感が充
満し、TVのバラエティ番組はやけっぱち
の笑いにあふれ、人々はつつましくも内向き
に生きる超保守社会。表紙から、こちらをみ
ている詩女の肖像。私は見ている。乗り越え
がたい何か、どうしても理解が及ばない現実
直視するとこの世は生きる氣力を失いそうに
なる、が、それでも生きる価値がそこにこそ
ある、と。

たわいない話の間に／死をはさむと／わた
したちのことは／うまれるそばから泡つ
ぶとなつて／頭上はるか／うみのおもての
眩しさへと／つきつぎのほつてゆき／はじ
けて消えた／黙るしかなかった／魚群は／
一瞬、烈しく乱れたあと／何事もなかった
ように／旋回しつづけていた(八月、)

だが裕美子さんはリアリストだ。それ故、
いつもこちら側の現実が意識されている。ゆ
うれいは終電車で駅に帰るし(「ふゆのゆう
れい」、人生はやはり二人分多く生きるもの
だ(二人多い)。人はいつも途中経過を生き、
なのに今という瞬間はいつも到達点なのだ。

イベント報告

第15回 あすなる忌

三枝 治

三年前に復活した「あすなる忌」が開催された。10日第15回「あすなる忌」が開催された。

「あすなる忌」は、1982年に閉店した「名曲茶房あすなる」をしのび、また、あすなるの創健者で経営者であった詩人の崔華國氏をしのぶ会でもある。

わたしもはたち前後の4年間、高崎で暮らしながら、その当時「あすなる」に頻りに通ったひとりである。煎りたてのコーヒーを飲みながら詩を読み、詩を論じ、またバロック音楽に聞き入った。わたしの青春はあすなるの雰囲気の中で彩られていると言ってもいい。あすなる忌が、高崎市鞆町の再開したあすなるで開かれるようになってから、この催しにわたしも参加するようになった。

あすなるに強い思いを寄せる者のひとりとして。今回のあすなる忌は、発起人代表



「第15回あすなる忌」メゾソプラノ歌手 天田美佐子氏

の曾根ヨシさんの挨拶の後、詩と音楽を中心に異分野の人々がつどって文化・芸術活動を展開した「あすなる」にふさわしく、歌とトークと題して、メゾソプラノ歌手である天田美佐子さんが、シューベルトの「野ばら」や日本歌曲の「花の街」などを伸びやかに歌い上げた。「あすなる」で生の歌声を聞くのは、はじめての体験であったが、さながら「天上界」まで響き渡るような高く澄んだその歌声に戦慄と感動を覚えた。天田さんも若きころ「あすなる」に通い、音楽の道に進んだのもあすなるがあったからだという。天田さんも「あすなる」と深い縁でむすばれたひとりなのである。

つづいて、上毛新聞論説委員長の藤井浩氏が、「あすなる」を追いかけてという演題で講演。藤井氏は、崔華國と、その周辺の人物にもふれながら、あすなるの歴史について熱く語った。

詩の朗読は、志村喜代子、平方雪子、黒川初美、斎藤みね子、関口将夫さんがおこなった。

第十九回 薔薇忌報告

四月二十四日、大手拓次生誕の地磯部温泉において、第十九回薔薇忌が開催された。

第一部は、墓前祭。地元中学生による「銀杏樹」などの詩の朗読の後、参列者全員による薔薇の献花が行われ、墓前は花に包まれた。

第一部 墓前祭



第二部は、会場を磯部温泉会館に移し、「語る集い」が行われた。

前半の講演会では、昨年度の第一回大手拓次賞佳作を受賞された山口和士氏が「日本のボードレール 拓次の光と影、その美的誘惑」と題して話された。

昨年度まで高等学校の校長先生をされていた山口氏。小学校時代のチョーク事件、前橋市立図書館長の渋谷国忠への手紙、緘黙児だった氏が湯川秀樹に会いに行つて声が出たエピソードなどのご自身の体験を、萩原朔太郎や拓次の詩との出会いと絡めて話されたのが印象的だった。

また、拓次の詩についての「ボードレールに強い影響を受けながらも、日本の風土の湿気を巧みに織り込み、独自の闇と想像世界にのめりこんでいった。拓次は自分の闇を隠そうとしなかった。」という指摘を、領きなが

薔薇忌

「第19回薔薇忌」講師 山口和士氏



拓次 光と影 講師

ら聞いた。

第二部の後半は、薔薇のケーキをいただきながらの茶話会となった。地元の小中学生や大手拓次研究会員の皆さんによる「満月」などの拓次の詩の朗読、関係団体の方々のスピーチが続いた。時間の都合で、予定していた方全員が朗読が聞けなかったのが残念だった。

(佐伯)

第44回朔太郎忌

「詩から音楽へ」

寺内 拓

今年が生誕130年に当たる節目の第44回朔太郎忌が、5月14日に開かれた。今回は「詩から音楽へ」というテーマで、第一部がシンポジウム、パネリストに作曲家の西村朗氏と西田直嗣氏、司会は朔太郎研究会会長の三浦雅士氏が担当した。

第二部はコンサートで、その一が西田氏作曲の朔太郎の五つの詩、その二は西村氏作曲



の猫町、その三は西田氏作曲の連歌「蛇苺」最後に西村氏作曲による「青猫」の五つの詩という多彩なプログラムであった。

会場はベイシア小ホール、第二部のコンサート盛りから座席はほぼ満席になり立ち見が出るほどであった。私の興味を引いたのは西村氏作曲の散文詩猫町であった。猫役が8人出て猫声を発し、ピアノソナタまで尻尾をつけおぎやあ、おわああ、と鳴くのである。

「一種狂気的ですけど、コミカルでもあるんですよね」と作曲した西村朗氏は云う。

天国の朔太郎さんが見ていたなら、思わず微笑むのではないだろうかと思は思う。

詩と音楽について、三浦雅士氏はこう云う「現代詩という言語作品の性格の問題があるにしろ、詩人と作曲家の関係が戦後になって疎遠になった印象がある。詩人はもっと作曲家の仕事に関心を持つてほしい」と。

まさにその通りで、我々詩を書く人間はもっと音楽に対して向き合わなければならぬ。そして年々充実し想像を高めていく朔太郎忌来年のテーマは何か、大いに期待したい。

あまりにも私的な

現代詩ゼミ報告

神保 武子

今年で二十四回になると聞きました。これが「詩」という磁場で活動をはじめてから、ゼミのほか会誌の発行、朗読会の開催など多彩な活動を続けていることを知って、会員と運営スタッフの努力に賞賛の拍手を送りたいと思います。

今年の現代詩ゼミは、四月一七日・高崎中央公民館で講師に國峰照子さんを迎えて「自作詩を語る」をテーマに開催されました。

最近、詩集「ドン・キホーテ異聞」、評論「二十歳のエチュード」の光と影のもとに橋本一明をめぐって、思潮社現代詩文庫「國峰照子詩集」と國峰さんの著書に触れて、緻密に計算されたコトバたち、多彩なイメージ、コトバと言葉のあいだを軽やかに跳びまわる國峰ワールドにすっかり魅せられていました。白石かずこ氏が《イマジネーションのゴージャスなこと、その飛躍とコトバ遊びの妙なる曲芸。》と評したその秘密に少しでも迫りたい、決してぶれない詩に対する考えをお聞きしたいと、わくわくしながら参加しました。当日会場の駐車場が満杯で遅刻するというアクシデントにあり講演は既に始まっていました。

参加者は会員外の方もいて二十人位、國峰さんを囲んで程よい集まりでした。講演は予め用意されたテーマ(質問)にそって、

・ 詩とは

・ 詩の音楽性

・ 詩の批評性

高崎現代詩の会が毎年開催している現代詩ゼミは、一九九四年に第一回を開催してから

・影響を受けた詩
という具合に話が進みました。

國峰さんは作曲をする、演奏をする、木彫もすると多才な人ですが、それが詩を書くとお互いがどのように影響しあっているか興味がありお聞きしたいと思っていました。

◆詩を料理に例えると、ことばという素材をどのように調理して盛り付けるか、味付けや器も大事ですが、食欲がなければ美味しく食べられない、食欲になるのが楽しいと好奇心です。

◆音楽でいう三つのW『What・How・Why』＝『何を・どう書くか・何故書きたかったのか』は詩の場合でも同じで、同人の批評などでそのことを確認できます。

◆文学館などで詩人の生原稿をみると、その人格がみえてきます。私は自分の字に恥じらいがあるので、自分の作品を客観的にみる事ができるのは活字になったときです。

以上私なりに印象に残ったコトバを紹介してみます。会は國峰さんのお人柄を映して終始真面目で楽しい集まりでした。



「第24回現代詩ゼミ」講師 國峰照子氏

第30回まほろばポエトリーステージ 新藤洋太・講演会

新井啓子

風薫る五月七日、久しぶりに訪れたまほろばは木々の緑が一層濃く深く目に映った。

「歷程」会員近藤洋太が演題に掲げた「宗左近・辻井喬・粟津則雄」の三名は、詩壇における重鎮であっただけでなく、近藤の詩歴を物語る重要な人物ばかりである。

それぞれの生い立ち、成長期の境遇が人にも多大な影響を及ぼすことは、詩人に限ったことではなく、文学をはじめとする芸術家たちが、出自や幼少の不幸を敏感に受けとめ、文学に昇華していく姿を私たちは幾度も目にしてきた。この三名においてもそれぞれが事情を持つ。戦火に母を奪われた宗が、詩作によって戦争を乗り越えようとしたこと。複雑な家庭環境と父への反発が共產主義への接近に繋がった辻井。恵まれた幼少期を送りながらも二次大戦後の時代への懐疑に拘泥した粟津。三人三様の人生を送りながらも、共通するのは「戦後という時代」である。

戦後七十年、「戦後詩」というジャンルは遙か遠くのもののように思われる。けれど、一九一〇・二〇年代に生まれ、長く戦後を生きた三名の生身の姿を振り返ると、それは決して遠いものではなく、私たちに「時代を生きる」宿命と詩作の必然を突きつけてくる。

そして、八〇歳を過ぎてなお、旺盛な創作力を持ち続けた詩人達に、あやかりたいと思ったのは近藤と私だけだっただろうか。



「第30回まほろばポエトリーステージ」講師 近藤洋太氏

インフォメーション

前橋文学館特別企画展

「心にふれる手紙展」

萩原朔太郎の生誕130年を記念して、萩原朔太郎を中心に、高橋元吉、萩原恭次郎、北原白秋、室生犀星、草野心平らの書簡を紹介する展覧会。

期間…7月16日(土)～9月22日(木)

会場…2階展示室

時間…9時～17時

観覧料…一般300円・高校生以下無料

◇展示解説 9月10日(土)

問い合わせ先／前橋文学館

(Tel 0277-2358011)

● 新入会員あいさつ ●

自己紹介

石田 洋

詩を書き始めてからまだ数年です。全く日本の現代詩に接していません。平成二十一年四月から始めました。県立土屋文明記念館文学館の「詩の講座」に参加していた妻が亡くなったためです。講座の人員減を防ぐためです。「現代詩」という言葉すら知りませんでした。三年で止めようと決めていました。評論を読んできた者にとって、特に日本の現代詩はあいまいで厄介者でした。嫌でいやで仕方ありませんでした。ある時文明館の駐車場でぐうぜん以前の県立図書館長に会い「発表をしなさい」と言われました。一人分の詩で十分だと思っていた身には大変な衝撃でした。活を入れられたわけです。上毛詩壇に一度だけと思っただけの投稿した一編の詩がどうも運命を変えてしまったようです。上毛文学賞をいただいでしまったのです。運命の出会いとはこういうものなのか。一編の詩だけで逃げる訳にはいかずに、一〇編ほどの詩をあらためて投稿用に準備することになってしまいました。現代に属している存在を振り返ることも必要であるのではと思います、自分の林を問

伐し下草を刈り、風通しをよくしようと詩を書いていただけです。一方通行にならないように「県立文学館 自主学習会」に参加しています。また、「裳」という同人にも所属しています。女性の同人誌に飛び込んだことには何の抵抗も感じていません。多くの人の感性に接して作品を書いてみる。男女の別でわかることは私には全く意味のないことです。目的を持っていて場があればそれによいと思っと思っています。詩を書くのは面倒なことです。寡作ですのどうなることかと思案しています。ともあれ、この会にお誘いくださいましたことに深く感謝しております。よろしくお願い申し上げます。

◆ 会員の住所変更

No.14 江尻 潔

〒370-3511

高崎市金古町二五六一一九

◆ 新入会員住所

石田 洋

〒371-0116

前橋市富士見町原之郷二二三一三

受贈詩誌御礼

*御惠贈感謝いたします。

長野県詩人協会会報 132

「とっとり詩人」 34 鳥取県現代詩人協会報

「皿」No.90 岩手県詩人クラブ会報

山形県詩人協会会報 30

「静岡県詩人」 127 静岡県詩人協会会報

福島県現代詩人協会会報 112

茨城県詩人協会会報 22

詩界通信・日本詩人クラブ広報 75

2016 福島県現代詩集 福島現代詩人会

2016 栃木県現代詩年鑑

前橋文学館報 43 栃木県現代詩人会

千葉県詩人クラブ会報 234

日本詩人クラブ広報「詩界通信」 74・75

大手拓次研究会会報「花野」 34

「桜堤」創刊号 熊谷詩人会

(七月三十一日現在 敬称略)



平成二十八年度 総会と秋の詩祭 開催のお知らせ

平成二十八年度総会および秋の詩祭を左記のとおり開催いたします。皆様方、万障お繰り合わせの上、ご参加をお願い致します。

期日 平成二十八年十一月二十三日（水・祝）
場所 前橋テルサ9F 赤城の間

受付開始 午後1時30分～
総会 午後2時～2時30分
秋の詩祭 午後2時40分～4時
懇親会 午後4時10分～

【総会】

- 議長選出
- 代表幹事挨拶
- 1号議案 平成二十七年事業報告
- 2号議案 平成二十七年会計報告
- 同監査報告
- 質疑応答
- 3号議案 平成二十八年度事業計画案
- 4号議案 平成二十八年度予算案
- 質疑応答

【秋の詩祭】

講師 江尻 潔氏
演題 「詩人の絵 画家の詩」をめぐって（仮）

◇講師紹介

江尻 潔（えじり・きよし）氏

一九六五年七月七日 前橋市に生まれる。

群馬詩人クラブ、詩誌「東国」会員

足利市立美術館学芸員

・展覧会「画家の詩、詩人の絵」（足利市立美術館・四月九日～六月十二日）の開催および同展覧会の公式図録兼書籍の刊行において、企画・監修に携わる。

著書 詩集『逆木』澁林書房

詩集『るゆいつわ』思潮社

詩集『虚光集（ひのみかげふみ）』思潮社

現在、高崎市在住。

【懇親会】

午後4時10分～
会場 前橋テルサ1F「オルヴィエーターナ」
会費 四〇〇〇円

◆◆編集後記◆◆

去る七月九日、「榛名まほろば」において「第24回 群馬詩人クラブ現代詩ライブ」見る詩聞く詩奏でる詩」を開催。会員外の参加もあり、盛会であった。次号にて報告予定。

（詩は人心の物に感じて声を発するところ、画はまた無声の詩とかや。形ありて声なし。そのことごとによりて情を起し感を催す。）と、鳥山石燕の『今昔画図続百鬼』跋文にある。来たる十一月の「秋の詩祭」では、江尻潔さんを講師にお迎えし、「画家の詩、詩人の絵」あたりのお話しをしていただく予定であるが、詩誌「東国」に発表されていた自作についてもお伺いできるかと思う。詩の表現方法において独自の道をゆく江尻詩。皆様、ご期待ください。

「母さん、僕のあの帽子、どうしたんでせうね？／ええ、夏、確氷から霧積へゆくみちで、谷底へ落とされたあの麦わら帽子ですよ。」夏になると、この西條八十の詩「帽子」を思い出す。盛夏、落ちていく帽子を思い描き、霧積へと向かったことがあった。多くの死者たち、失ってしまったもの、忘れていた出来事を思い出させる八月。本日九日の朝刊には、天皇「生前退位」の意向を濃く滲ませたお言葉と、イチローの米3000安打達成、日本画家・松尾敏男氏と絵本作家・太田大八氏の死亡記事、リオ五輪の選手たちの活躍ぶりが掲載されている。この会報を送る。今月末には、もう夏は過ぎていくだろう。あつという間に、いや、あも、んもなく、そう、容赦なく日は過ぎてゆく。（金井裕美子）